

特別展示「サンフランシスコ講和への道」について
(参考資料)

外交史料館では、2012年7月4日(水)から10月31日(水)までの間、特別展示「サンフランシスコ講和への道」を開催する。

この特別展示は、サンフランシスコ平和条約発効60周年(1951年9月8日調印、1952年4月28日発効)を記念し、当館所蔵史料によって、サンフランシスコ講和に至るまでの日本の外交活動を振り返るものである。

本展示では、対米交渉関係文書を中心に、講和に至る経緯を示す重要な外交史料を展示するほか、日米安全保障条約署名用に米国側が用意した万年筆などの講和関連史料、写真パネル等を併せて展示する。

展示史料は全19点(全て原本)。主な展示史料は以下のとおり。

展示史料の概要

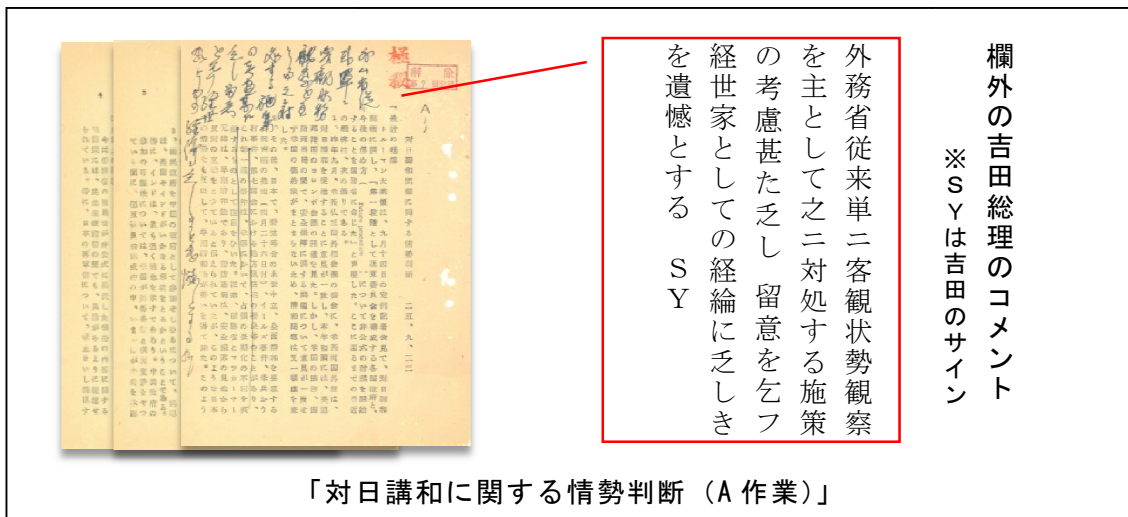
1. 対米交渉準備作業に関する史料

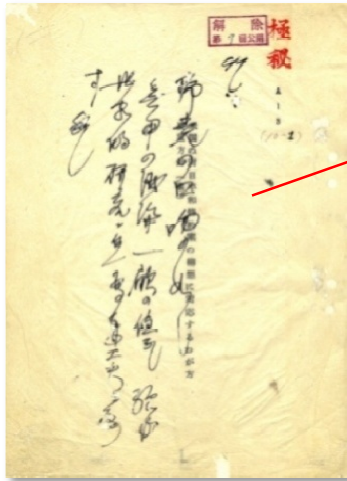
【主な展示史料】

- 「対日講和に関する情勢判断(A作業)」
- 「米国の対日平和条約案の構想に対応するわが方要望方針(案)」
- 「目黒外相官邸における有識者会合記録」

対米交渉に備えて外務省事務局が作成した文書を展示する。

朝鮮戦争が勃発し、1950年9月、米国が対日講和実現の意思を示したことを受け、外務省では対米交渉に備えた対応策の検討を始めた。事務局では、9月から10月にかけて、米国の対日講和構想に関する説明資料を作成し、吉田総理に提出したが、同総理からは「経世家としての経緯に乏しきを遺憾とする」「野党の口吻の如し 無用の議論一顧の値なし」などと厳しいコメントとともに差し戻された。その他、再軍備をめぐる議論がなされた目黒外相官邸における有識者会合記録などを展示する。





野党の口吻の如し
無用の議論一顧の値なし
経世家的研究二付一段の
工夫を要す
SY

表紙の吉田総理のコメント

「米国の対日平和条約案の構想に対応するわが方要望方針(案)」

2. 吉田・ダレス会談に関する史料

【主な展示史料】

- 「第1回吉田・ダレス会談記録」
- 「再軍備発足について」(英文・和文原案)
- 「吉田・ダレス会談合意文書」

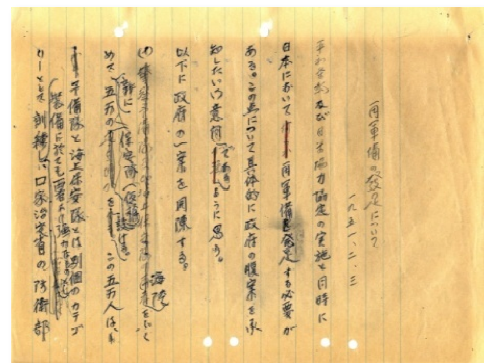
吉田総理とダレス特使との会談等に関する史料を展示する。

1951年1月にダレスが訪日し、講和と安全保障問題について日米間で協議が行われた。1月29日に行われた「第1回吉田・ダレス会談記録」には、自由世界の防衛に貢献するよう述べたダレスに対し、吉田総理は、独立の回復が先決であり、再軍備には経済的・対外的に困難があると応じたことが記されている。

この会談の後、吉田総理は事務当局に命じて再軍備の発足に関する日本側の腹案を作成させた。吉田総理の意向に沿って作成され、後に米国側に提出された文書「再軍備の発足について」(2月3日付)には、5万人からなる「保安隊」の設置をもって、将来日本に再建される民主的軍隊の第一段階とすることが記されている。吉田・ダレス会談で合意された文書は、2月9日、井口貞夫外務次官とアリソン公使との間で「イニシアル」された。



「第1回吉田・ダレス会談記録」



「再軍備の発足について」

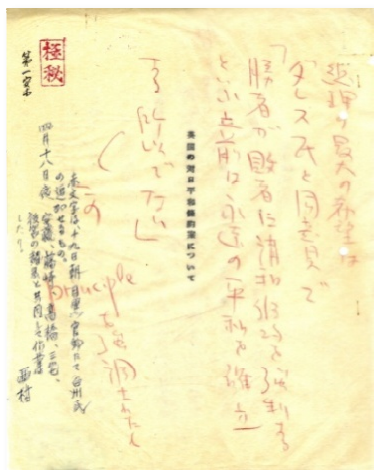
3. 講和会議開催に向けた協議に関する史料

【主な展示史料】

- 「英国の平和条約案に対するわが方意見（案）」
- 「日米安全保障協定の修正案」
- 「講和会議への対日招請状」

講和会議に向け、平和条約草案が関係国に示される中で日本の対応等を示す史料を展示する。

1951年4月に米国から内々に示された英国の平和条約草案は領土、賠償問題等、日本にとって厳しい内容だった。これに対する日本側意見書案の表紙には、文書を一読した日本側の反応として、「『勝者が敗者に講和条約を強制するといふ立前は永遠の平和を確立する所以でない』この principle を強調されたし」と朱筆で大書されている。その他に、「日米安全保障協定の修正案」や「講和会議への対日招請状」などを展示する。



表紙の白洲次郎のコメント
総理最大の希望はダレス氏と同意見で
「勝者が敗者に講和条約を強制するといふ立前は永遠の平和を確立する所以でない」この principle を強調されたし

「英国の平和条約案に対するわが方意見（案）」

4. その他の講和関連史料

【主な展示史料】

- 硯、筆、墨、水差し等一式
- 「万年筆」

吉田総理が講和会議に携行した硯、筆、墨、水差しや、万年筆を展示する。

万年筆は日米安全保障条約の署名のために米国側が準備したもの。「SECURITY TREATY 1951」と刻まれている。ただし、平和条約の時と同様に、吉田総理は自分で用意した万年筆を使って署名した。



「万年筆」